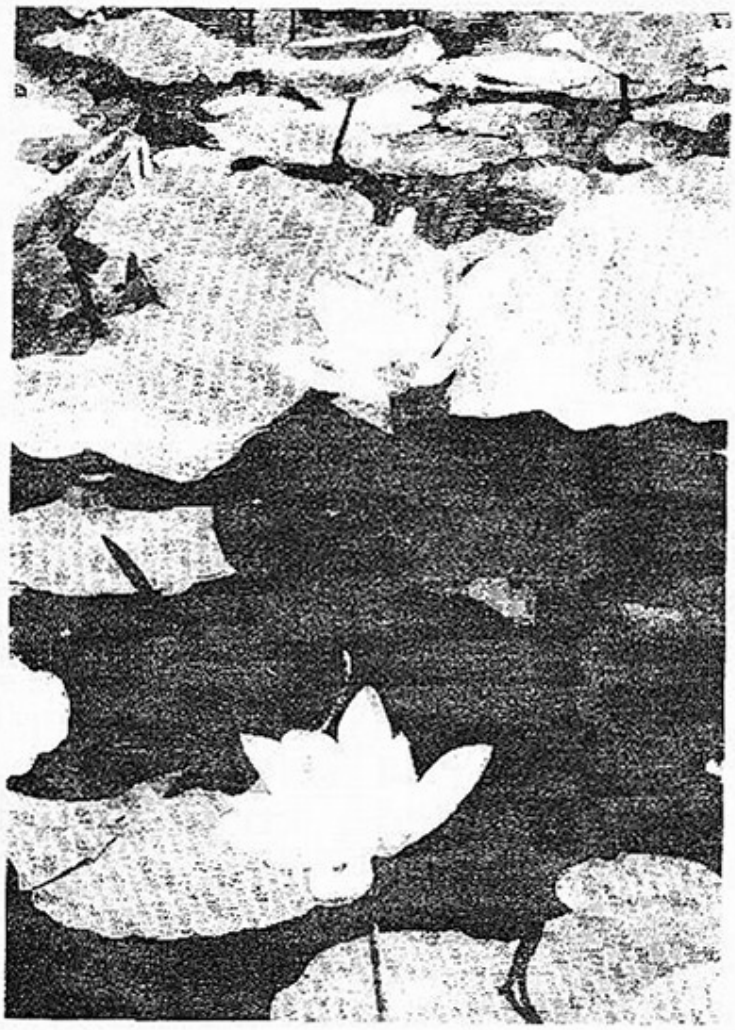
増林の古代蓮



越谷市 増林 2－494
山本泰秀

1．甦った古代蓮

増林の地に盛夏になると７月中旬から８月中旬までの間に次々と淡い紅色の蓮の花が開花する。この花は永い眠りから目覚め、毎年夏になると端正で大型の美しい花を咲かせるのである。

場所は、増林の護郷(もりさと)神社の前方、吉田大氏所有の休耕田（増林根道１１４４番地）である。この地は古くは真言宗福寿院の境内に隣接した所で、歴史の古さを感じる土地柄といえよう。この寺院は、明治になって廃寺となり、現在はわずかな墓地がその面影を残すのみである。

蓮の種が発芽した経緯を次に述べたいと思う。当時、増林地域は地盤沈下が激しく、農業用潅漑用水路の不等沈下で用水不足となり、干ばつ地の面積が年々拡大されていった。そこで、昭和５２年（１９７７）、増林全域にパイプライン敷設工事が行われた。これは地下８０センチまで掘り下げ、パイプを敷設する工事であった。この時、地中にあった蓮の実（種）が傷つけられて地表近くまで掘り出されたので発芽したとみられる。最初（昭和５２年）は数本が東角地から生え、以後、年を追うごとに徐々に全面に広がっていったと言う。

私が平成１３年(２００１)に、横４０センチ、長さ４８センチの発泡スチロールの箱の中で、種からの栽培を試みたところ、春から秋までの間に根茎は２メートルの長さにまで達したのである。このことからして、まして水田ではもっともっと旺盛に成長してきたのであろう。

この年の８月、この水田の蓮を埼玉純真女子短期大学の卜澤美久氏に調査していただいた。葉の特徴としては、葉先に２箇所のトゲがあり、花弁の数が１１から１３枚で、葉の開く角度が約１２０度であった。古代蓮特有の特徴がみられる在来野生種であると結論づけられた。

2．周辺環境

旧増林村・増森村には、古くから沼に関する小字名が存在していた。千間堀（現、新方川）流域を例にあげると、旧増林村には浮沼・永沼、旧増森村には茨沼・魚沼・菱沼という、かつて古き時代の小字名があって、低地に沼が点在していた。昭和３３年（１９５８）の増林土地改良事業によりその面影は一変してしまった。かつては、点在していた池のようなこれらの沼には葦や真菰（まこも）も生え、魚もたくさん住んでいた。明治９年（１８７６）の「武蔵国埼玉郡村誌」によると、旧増林

村では田舟が１９艘、増森村では１２０艘も所有されていたという。沼沢地が広がっていたことを裏付けるものである。これらの田舟は、昭和になっても使用され続け、田植えの稲運び、刈り入れ時の稲運びなどに利用されてきたのだった。そして、昭和３３年の土地改良後に使用されなくなったのである。

このような増林・増森の沼沢地が広がる低地には、古き時代には日本在来の野生の蓮や鬼蓮も多く生えていたことであろう。

裏表紙の写真１と２は、鬼蓮の種と田舟である。鬼蓮の種がやや小さめなのは、未熟のためである。この種は、平成６年（１９９４）３月、「青年の家」（現在、生涯学習センター）の前の排水工事の際に出土したものである。古くはこの地は茨沼といわれた一帯であった。排水工事によって偶然にも土の中に埋もれていた種が地上に掘り上げられ、石井正男氏によって発見され、今まで保存されてきたものである。写真２の田舟は、全長が１８３センチ、頭部５５センチ、尾部７７センチ、最大幅８０センチ、深さ２７センチである。

３．化石と植生

（１）日本で最も古い蓮の化石

日本で最も古い蓮の化石は、昭和２７年（１９５２）に福井県今立郡(いまだてぐん)上池田村皿尾(さらお)付近で発見された蓮の葉の化石である。植物学者の松尾秀邦氏がたまたま腰をおろした石が不安定だったので、ハンマーで割ったところ蓮の葉の３枚の化石が偶然現れ、発見された。この化石は白亜紀後期のもので、日本で最も古い「トウヨウハス」といわれている。裏表紙の写真３は上池田村(現、池田町)皿尾層産化石の「トウヨウハス」（福井市自然史博物館蔵）の写真である。

（２）種子から発芽された例

千葉県検見川東大厚生農場で、昭和２５年（１９５０）秋に、大賀一郎博士によって発掘が開始された。翌年の３月３０日、泥の中から約２０００年前と推定される一粒の蓮の実を発見された。その後さらに２粒が発見された。５月６日、博士は発芽実験し、実生(みしょう)苗からの栽培に成功した。翌年の昭和２７年（１９５２）４月７日、根茎を分根、一番充実した根茎を地元民に託した。同年７月１８日に永い眠りから覚め、淡紅色の大輪の花を咲かせた。これが世に言う「大賀

蓮」である。

岩手県平泉中尊寺金色堂に安置されている藤原三代のご遺体調査が昭和２５年（１９５０）、学術調査として実施された。この時、２代基衡の棺にオニグルミ、モモ、ウメ、カキ、クリ、イネ、ヒエなどの多くの植物の種子が入っていた。また文治５年（１１８９）没の４代泰衡の「泰衡首塚」棺の中にあったのが約８００年前の蓮の実。これは「中尊寺蓮」と呼ぶこととなった。大賀博士の助手をしていた長嶋時子氏（恵泉女学園短期大学教授）が、平成５年（１９９３）、２個の種で実生開始。蓮の実は果皮が極めて堅く、そのままでは発芽しないために、水と空気が入るよう実の細部を花鋏で切り取り、水道水をコップに入れ、種２個を落とし入れた。４日目に発芽。実生から５年、平成１０年（１９９８）７月３０日、約８００年前の蓮の開花に成功。以後、中尊寺に持ち帰り、段々と増やして現在に至っている。

４．自生蓮

自生した古代蓮の例としては、当地増林から北西にあたる行田市にて見つかった「行田蓮」があげられる。昭和４６年（１９７１）に、公共施設（清掃工場）建設のため造成工事が行われた。その後、昭和４８年（１９７３）、池の水面に多くの丸い葉が浮いていることに気が付き、調べると蓮の葉であることがわかった。地中深く眠っていた行田蓮の実がこの工事によって掘り起こされ、その後自然発芽して一斉に開花した。このような全く自然的に発芽したという例は過去にもなく、当時は全国的にも珍しいことであるといわれた。埼玉大学名誉教授で植物学の権威であられる江森貫一氏が調査を行ったところ、２５００年から３０００年前のものと推定された。

次に白岡の古代蓮について記すと、こちらは、平成３年（１９９１）から４カ年にわたっての土地改良事業による工事で、蓮の実が多数発見され、その後、水田の稲の苗の間から５０から６０本もの細い芽が自生するようになったという。この「白岡古代蓮」の開花時期は毎年７月上旬から８月中旬までの期間で、みごとなピンク色の大輪の花を咲かせている。平成１０年（１９９８）７月の埼玉純真女子短期大学卜澤美久氏の調査と平成１１年２月の東京大学教授渡辺達三氏の調査によって野生の古代蓮と確認された。

5．私の発芽試験

護郷(もりさと)神社そばの休耕田から採取した古代蓮の種の形状は、直径約１７ミリ、外径は１０ミリで細長く、外皮は　蝋状でつるつるしていて非常に堅い硬実種(こうじつしゅ)である。それ故、休耕田の地中に埋もれたままパイプライン敷設工事が始まる昭和５２年（１９７７）まで種が保存され続けたのであろう。昭和５２年に工事で地中の種が傷つけられて自然発芽して発見されて以来、開花・発芽を繰り返して今に至っている。平成１３年（２００１）３月１５日、私がこの休耕田から採集しておいた平成１３年度の種を蒔き、発芽を試みたのである。前述の如く、種は種皮が堅く、吸水しにくく、発芽の可能性が低いと思い、種皮のとがった部分を平ヤスリで削った６粒と種皮を削らないもとのままの６粒とを２列に並べ、発泡スチロール製のリンゴ箱２箱に田の土と配合肥料を混和し、培土として水を張り、発芽を待った。傷をつけた種を蒔いた箱に、４月１５日１本、１８日２本、２５日３本の合計６本すべてが発芽した。一方、傷をつけなかった種のすべてはやはり発芽しなかった。

裏表紙の写真４から７を参照のこと。

6．薬用蓮

蓮は鑑賞するだけでなく、中国において２２００年前の漢代（紀元前２０６年から後２２０年）から蓮は万病の薬、不老長寿の薬として珍重され、現在でも漢方薬として広く用いられている。

平成１４年（２００２）７月　山本泰秀　記す

《参考文献》

「日本化石図譜」（朝倉書店）
「蓮、ハスをたのしむ」（ネット武蔵野）
行田市広報版
研究紀要「８００年前のハスの開花」（恵泉女学園短期大学）
「武蔵国埼玉郡村誌」
「漢方医学基礎診療」（創元社）
表題写真（毎日新聞社提供）
田舟の写真（中島三蔵氏蔵）

写真１

増林産の古代の
鬼蓮の種子
（拡大写真）

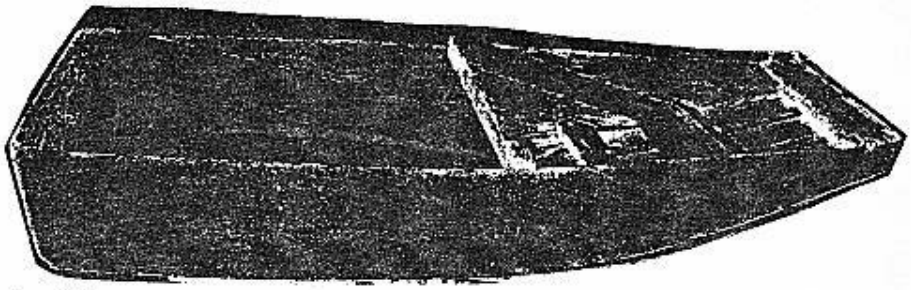


写真２　田舟

写真３　トウヨウハス

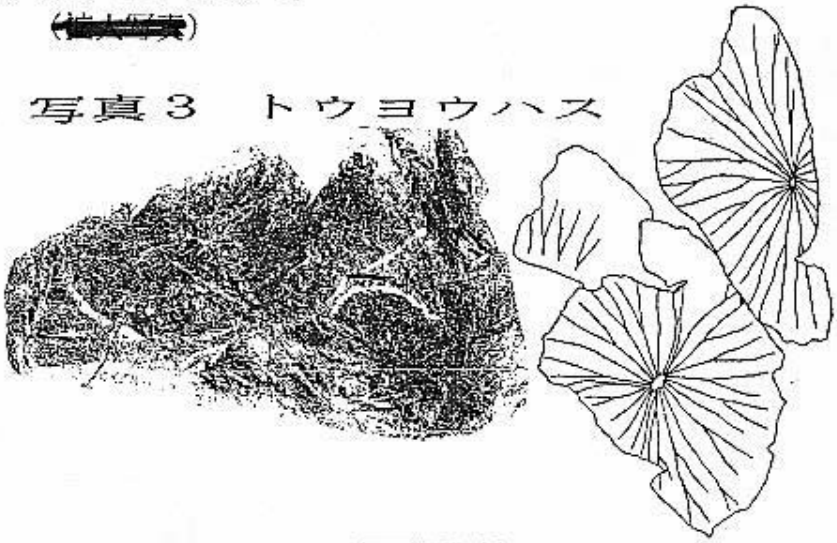


写真４　発芽

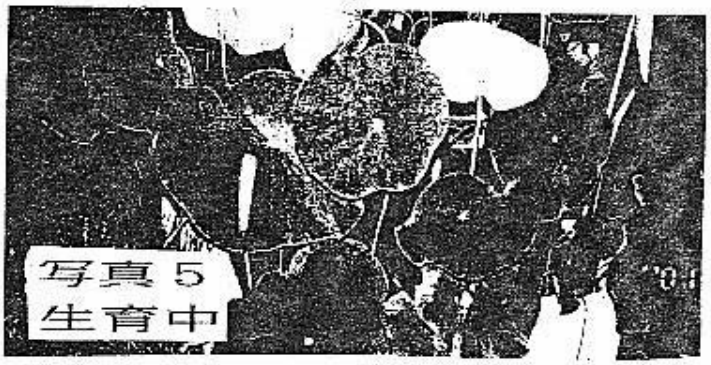


写真５
生育中

写真６

掘り出した
れんこん

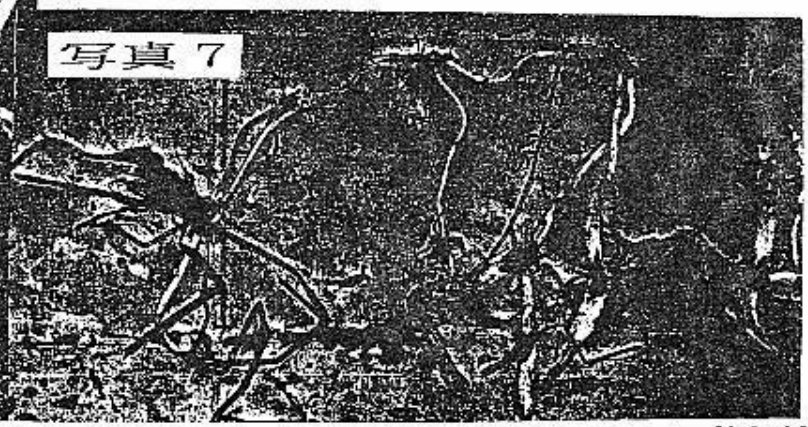


写真７

１年間で成長した１本分の根茎